

The senior author is grateful to the Director, Botanical Survey of India, Howrah for extending necessary facilities and thankful to Dr. R.S. Raghavan, Regional Botanist at Kew (England) for valuable information.

\* \* \* \*

De Candolle (1838) によって *Oreoseris pusilla* Wall. として記載された植物は、その後 *Gerbera lanuginosa* などと混同されてきたが、再検討の結果独立種であることが分かったので *Gerbera* 属にうつし新組合せを行った。ヒマラヤのクマオン以西カンシルまでの高山草原に分布している。

□〈四川植物志〉 編輯委員会編：四川植物志 (Flora Sichuanica) Vol. 1, 509 pp. 1981. 四川人民出版社，成都。5.19 元。四川は中国の西南亜熱帯気候区に属し，中央には広大な四川盆地があり，その高さは 200-700 m であるが，北方と西方とは高く最高は 7500m にも達する。第三紀以来大きな変動を来たさなかつたので如水杉や銀杉のような古い植物がよく残っており，1 万種前後が自生しているという宝庫である。この地域の蘚苔植物から上の全植物を，26 巻の大冊にまとめ 1980 年代には完成させるという。第 1 巻にはまとまった科 20 科を収めている。カツラ科，ドクダミ科，リュウブ科といった小さな科が多いので分類学的に興味のあるものが出ているし，クスノキ科やカエデ科のような大きな科もある。大体各種について図解をしており便利である。種類はさすがに多く，たとえばヒトリシズカ科だけで 2 属 10 種が並んでいるから壯観である。記載の様式は各省からでている植物誌と違わない。四川はヒマラヤと日本との中間に位置し，気候も似ているので，日本のフロラの研究には欠かす事のできないものである。

(前川文夫)

□ Allen, O. N. & Ethel K. Allen: **The Leguminosae** 812 pp. 1981. Macmillan Publishers Ltd. & The University of Wisconsin Press. 35.00. サブタイトルにもあるように特徴と利用と根瘤菌といったいささか異なる分野を一つにした点が異色である。はじめに総論として *Rhizobium* に 6 種を挙げ，それと染色体数との関連からジャケツイバラ亜科 ( $x=8$ ) の原型から，すべて根瘤がつく Galegeae が出発したという主な系統関係を述べ，ついで葉，花，果実及び根瘤の種々相を図示。終ってマメ科のすべての属を ABC 順に挙げ，これに形態，利用面，及び根瘤について述べている。中々詳しく，たとえば Hutchinson (1964) から 15 年ほど経っているのに，Phaseoleae-Phaseolinae だけでも 40 を数え，新属も 11 を増しているから他は押し知るべしである。それでいて，*Azuki* Takahashi や *Rudua* F. Maekawa を落としているからまことに腑におちない。子葉や第一葉の特色が脱落しているのも残念である。それらを除いては新しい分類の基準の一つともいえるであろう。

(前川文夫)